

秋田市退職校長会 会報

# 柿水

きくすい

題字・佐藤重義

第 43 号

令和2年3月21日発行

〈事務局〉

秋田市手形学園町1-1

秋田大学教育文化学部  
同窓会旭水會 内



## 木<sup>き</sup>守<sup>もり</sup>柿<sup>がき</sup>

秋田市退職校長会会長 佐藤俊彦

冬枯れを深めていく景色の中に、ひときわ鮮やかな橙色の柿の木がある。たわわに実った柿の実に雪が降り積もり、白と橙色のコントラストが美しい。かつては、「木守柿」の数個を枝先に残し、秋の収穫を神に感謝し、鳥たちへのおすそ分けをしたものであるが、近年は一粒の「柿もぎ」もされずに、全身に実をつけたまま冬を越す柿の木が目立っている。

昔から「柿もぎ」は、爺さんと孫の仕事であった。そして、皮をむき紐に結ぶのは、ばあさんと娘の仕事であった。軒先に吊るすのは息子の仕事で、吊るした柿を時々もんで味見するのが、孫の仕事であった。

だが、爺さんと孫の「柿もぎ」がないまま、冬を越す柿の木が増えてきたことは、家族みんなの暮らしが変化して来ているのかもしれない。何世代かが同居していた時代は昔話になり、核家族化が一層進んで、息子や孫が忙しくて帰れない。家庭の味も、その家族独自の風習も、家族団欒の居間の雰囲気も、いつしか忘れられた。孫と「柿もぎ」をする楽しみは、爺さんの前から消えてしまった。

白い雪景色の中に、「柿もぎ」されていない柿の木を見て、ふるさと秋田の原風景が変化してきているのを感じるのは、私だけであろうか。

11月1日は「あきた教育の日」 秋田の子どもの今を語り未来を語る日

## 現職校長会との 教育懇談会から

令和元年11月9日（土）協働大町ビルにおいて、現職・退職校長会合同教育懇談会が開催された。

開会の挨拶では、秋田市小学校長会今田智範会長から、学校現場は働き方改革が大きな教育課題としてクローズアップされ、教職員の勤務時間に対する意識改革と実効性のある業務改善の2つの目標を掲げ、学校運営に務めているとの話があった。



退職校長会佐藤俊彦会長からは、秋田県  
退職校長会結成50周年記念式典でのシンポジスト東北大学  
大学院有本昌弘  
教授の話題や、  
1980年代  
に秋田ではす  
でに習得型の授  
業が実践され、最  
先端の授業実践  
が行われていた  
ことなどの話  
があった。

来賓祝辞では中央教育事務所稲田修所長から、学校経営の活性化に向けて「中央教育事務所との重点と関わり」から、学校訪問を行って参考となる取組の紹介、今年度の秋田地区

の教職員の年齢構成、退職校長会結成50周年記念誌から同職した校長の言葉を引用した同僚性に触れた話があった。

続いて、秋田市教育委員会嶋崎公人教育次長からは、東日本大震災で犠牲となった大川小学校の遺族が石巻市と宮城県に損害賠償を求めていた訴訟に触れ、学校と教育委員会に、より高度で重い安全確保義務を求めた判決が下されたことや、異常気象により全国各地で河川の氾濫等により甚大な被害が発生していること、市内の住宅地にクマが出没している現状から自然防災の充実を図ること、現在進められている学校適正配置について等の話があった。

### 教育懇談会 趣旨説明

昨年度に引き続き、懇談会テーマ【学校経営の活性化のために】～一人一人の教員の「教師力」向上に向けて～グループ協議題「教師文化の確かな継承に向けて」第2年次「～」として話し合いが行われた。始めに研修担当より次のような趣旨説明があった。

#### 【趣旨】

昨年度の懇談会では、教員の大量退職時代における若手教員の増加や、少子化による学校規模の縮小等の状況下で、若手教員や中堅教員に教師文化を確実に継承していくこと

や、中高年齢教員の志気を維持・高揚することがこれからの学校経営においての課題であると考へ「教師文化の確かな継承に向けて」をグループ協議題とした。

討議では、「研修会・研究会の工夫」「校務分掌の工夫」「若年層の育成」「ミドルリーダーの育成」「ベテラン教員のモチベーションの向上」「校長の役割」など多岐にわたり活発な話し合いが行われ様々な意見が出された。

県退職校長会が、全県域を対象に実施した「学習指導に関するアンケート調査」の結果を基にまとめ上げた「秋田県退職校長会結成50周年記念誌」を見ると、多くの教員が、日常的な教育活動の中で、上司や先輩、学年部や同僚教員などから学んだことが自身の指導力向上に役立ったと回答している。

同僚性を大事にして熱心に共同研究に励んだ教師たちの「自主的な研修」によって培われた「授業力」が、真摯に学ぶ秋田の児童生徒たちを「質の高い学習者」へと育て上げてきたものと考えられる。

また、授業実践の事前に行う教材研究を具現化したもの一つである「学習指導案作成」については、退職した教師に比べ、現職教師の重視度がかなり低い傾向にあり、児童生徒の学力保障・成長保障を使命とする学校教育に携わる教師にとっては、由々しき事態であると指摘している。

自ら学ぼうとする児童生徒を育てることを



念頭におき、そこに向かって努力する教師の資質・能力の向上こそが、教育指導の礎であろう。

教師の学びは、同僚性によるところが大きいことを再確認し、今後の教員大量退職時代を見据えて、これまでの優れた実践知や経験知を、確実に継承できるようにしていくことが、今求められている。

## グループ討議から

趣旨説明後のグループ討議では、活発な

意見交換が交わされた。多くの意見が出された中で、「同僚性」「授業力の向上」「働き方改革、その他」などに就いてまとめてみた。

### 《同僚性について》

同僚がいるから教師として成長する。教師に力なくして、子どもに力を付けられない。

- 職員室でのたわいのない話や先輩にアドバイスをもらうなど、人とのつながりができると同僚性が生まれる。
- 授業力もさることながら、人間力も大切である。職員同士の交流の場を意図的に設ける必要があると思われる。
- 一昔前は、飲み会で叱られながら教師として成長してきたが、今は飲み会にも参加しない若い先生たちも増えてきている。学校での話し合いやアドバイスをできる環境を作っていく必要がある。
- 同じ年の若手が少ない今の世代では、勤務時間内で同僚性をはぐくんでいくことは難しいのではないかと。昔のイメージで同僚性は語れない。少ない若手の同年代教員が増えていくことを期待したい。

### 《授業力の向上について》

若い時に指導案を作成したことが力になっている。仲間と共に協議しながら、指導案を作成する土壌が大事である。全国学力テストの成績が上位なのは、教育の深さが秋田にあるからだと思う。

県外交流で感じたのだが、秋田で普通にやっていることが県外では違っていた。専門のことを秋田の先生たちは、親身になっ



て相談してくれる。人とのつながりがアドバイスの基になった。

新規採用者には、研修体制が整っているが講師には薄いので、校内で若手教員への研修を設けるようにしている。

目の前の子どもの実態を把握して、指導案の展開部分で指導観や子どもの実態についていかに傾注して考えていくかが大事であり、指導観のみに固執していくことに懸念がある。

略案ながら、「授業を見合う週間」を設定

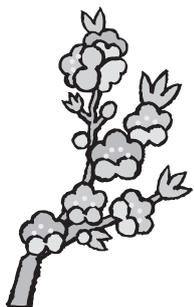
- ・ 参観シートで交流している。若い講師への手厚い支援を心がけている。教科の枠を超えたアドバイスも効果的である。
- ・ 道徳科や特別活動の教科の枠を越えた研修が効果的であるように思う。教科の枠を越えて本質的に学び合うことで、課題の持たせ方等の新しい気付きが生まれる。
- ・ 授業力は授業を通してしか育たない。人間教師が人間を育てるのであって、教師自身が誇りをもって、生きがいをもって、お互いの伸びしろを高めながら、互いに周囲を伸ばす方法があるのではないか。
- ・ 単学級や教科が一人しかないという学校もあるが、専門外の授業を見たり他学年や学団で授業を見たり、近隣の学校訪問の授業をあえて見る機会を設けたりすることは、校長としてとても大事なことである。
- ・ 指導案を書く力を付けることは大事である。また、人間としていろいろと体験をして視野を広げることも必要であるが、そうした経験が不足していることもあり見極めて指導していかなくてはならない。
- ・ 若い教師をどう育てていくのか。授業力を上げていくには、研修が必要である。しかし、なかなかそうした場を設定することが難しい。若い教師には、授業を観る機会を多く設けるようにしたり、様々な主任を経験させ、ベテラン教師がアシストしていくのも一つの手である。



《働き方改革・その他等について》

- ・ 職員の時間意識は改善されてきている。業務はこれ以上削れない。
- ・ 働き方改革を優先し過ぎるあまり、若手の成長を止めてしまうことはあってはならないので、そのバランスの取り方に悩みをもっている。
- ・ 若い先生たちが、自宅から離れた勤務地で一人で住んでいることもあり、私生活のケアが必要である。

- ・ 大量退職が終わると、40歳代の職員が責任のある立場になる。そのことを見通して分掌を考えていくことも必要である。ベテラン教師から若手教師へ分掌をどうスライドさせていくかということが課題である。
- ・ 保護者対応も複数対応するなどしており、教員の多忙化が課題である。
- ・ 小学校においては、16時15分から打合せが可能であり、職員打合せ後に学年部の打合せを確保することができる。中学校では週1回部活動の休止日があるので、そのような時間や場を設定できるのではないか。このような機会が若い人を育てることに繋がっていくのではないか。
- ・ 新たな取組をする中で、教頭や教務主任は、日々忙しく新たな提案をするのが難しく、校長から新たな提案をする機会が多くなっているのではないか。
- ・ 職員会議や朝の打合せの回数を減らしている学校もあるが、それで職員の共通理解が図れるのだろうか。
- ・ 校種、学校規模、年代構成などによって「若手を育てる」「学校文化を継承する」などの学校課題が異なってくる。



## 教育懇談会

## 現職校長の感想

飯島南小学校長 菊田 靖

元号が平成から令和にかわった年、11月9日（土）、協働大町ビルにおいて現職・退職校長会教育懇談会が開催されました。退職校長会から24名、現職からは32名が参加し、活発な懇談会となりました。

懇談会では「教師文化の確かな継承に向けて（2年次）」という討議題のもと、近年の現場の様子を踏まえたご助言をいただくことができました。今、急速に教職員の世代交代が進む中、現在も様々な立場でご活躍の諸先輩のお話は、どれも心にしみ入るものでした。

「授業力は授業でしか伸びない」「人間教師が人間を育てる」「記憶に残る言葉やフレーズを生み出す力」などの言葉は、教育者として根源に据えておくべきものであると再確認することとなりました。学習指導要領の改訂や社会・保護者の多様な考え方、児童・生徒の実態等、教育現場へのニーズが一層多様化する中、見失ってはならない事に改めて立ち戻らせていただいた感じがします。また、職員に適材適所の役割を経験させ、そこ

から影響を広げていくイメージで、教師文化を継承していくというアドバイスには、非常に納得をさせられました。この先の社会が予測困難な時代といわれようと、学校教育目標を達成するための柱の一つは学習指導であり、教科指導の研究をおろそかにすることがあってはならないという思いも、再確認することができました。働き方改革が取り上げられる中での教師文化の継承はどうあればいいのか、日々迷う現職校長にとって、行く先を照らしていただいた思いです。

秋田県退職校長会結成50周年記念誌『秋田の教育 あすを見つめて』では、きめ細かなアンケート・分析とともに、これまでの秋田の教育が、どのような努力と工夫をもって進んできたかが、明確に示されています。私たち現役校長こそ、先達の熱い思いと尊敬すべき実践を継承し、秋田の教育に誇りをもって日々の学校経営に邁進していきたいと思えます。

外旭川中学校長 中村 知明

本懇談会には初めての参加ということで、緊張しながら会場に向かいましたが、かつてお世話になった退職校長会の諸先輩方が、以前と変わらぬ笑顔で温かく迎えてくださり、肩の力をふっと抜くことができました。

グループ討議では、教員の大量退職時代に

おける若手教員の増加や少子化による学校規模の縮小、さらに働き方改革という新たな課題への対応が迫られる中、「教育文化の確かな継承に向けて」を討議題として、若手教員や中堅教員に秋田の教師文化をどうやって確実に継承していくか、中高年齢教員の志気をどうやって高揚していくかについて、活発な意見交換が行われました。校種や学校規模、地域性などが異なる中、各校が抱える課題や取組も多種多様にわたっています。「働き方改革が進む中、校長として、どうやって教師を育てていくか?」「秋田の教師の授業力を、校長として、どうやって若手教員に伝えていくか?」等、進行役の伊藤栄二元校長先生が、現職の校長が抱える課題や悩みを、うまく引き出してくださったお陰で、諸先輩である退職校長の方たちからは、これまでの豊かな経験と実践を土台とし、示唆に富んだお話をたくさんお聞きすることができました。

さらに、引き続き行われた懇談会では、退職校長会の諸先輩たちが胸襟を開き、自身の校長としての様々な体験談を話してくださいなど、楽しい中にも、有意義な時間をもつことができました。

今後も、本協議会が、秋田の教師文化を確かに次世代に継承する機会となることを祈念するとともに、退職校長会の諸先輩方におかれましては、いつまでも若々しく情熱を持ち続け、我々の道しるべとして後輩たちを導いていただきますようお願い申し上げます。

# 「楽しい研修会」のご報告

## 一、各駅停車の旅「四県なのに十一個の県境駅」

八月二十五日、四名参加。

羽越線で秋田から新庄へ。新庄駅では「新庄祭り」の山車を見学。陸羽東線に乗り換え鳴子で下車し、温泉を堪能。再び乗車し小牛田へ。そこで東北本線に乗り換え北上へ。北上線で夕刻のほつとゆだ駅に到着。ここでの夕食と反省会后、横手へ。そして、奥羽線に乗り一路秋田へ。途中、通過する駅の歴史や駅名の由来などを佐藤重義氏から詳しく解説していただきました。車窓からの景色を眺めていると、県境を境にして家屋や木立、生育植物などに大きな違いがあったり、線路に出没した熊に急ブレーキで対応する運転士の操作技術などを間近で見たりするなど、貴重で楽しい旅となりました。(長澤)

## 二、酒蔵探訪「天寿の旨さを探る！」

十月二十六日、酒好き五名が参加。由利高原鉄道「おぼこ号」に初めて乗って矢鳥駅まで。アテンダントの心温まるサービスも最高！蔵は駅舎のすぐ前にあり、直行。三十七歳と県内で一番若い一関杜氏自らの案内で蔵見学。この時期でなければ飲むことのできない限定酒を堪能。帰りの電車内と秋田駅前居酒屋で大反省会。最高に盛り上がった研修会

になりました。(大山)  
三、アトリオン音楽ホール「オルガン・クリスマスコンサート」

十二月二十一日、十名以上参加。県主催事業を本会の研修と兼ねて企画し五年目、秋田県出身の小松真由美氏のコンサートを開催。小松氏は、中学からパイプオルガンを学び、昨年四月からアトリオンのオルガニストに就任。ヨーロッパ各地でも研鑽を積んでいる方です。コンサート当日も、素晴らしい演奏を披露していただきました。

これまで本会の研修会は、全て秋田出身の優れた演奏家を選びすぐり企画してきましたが、毎年、多くの会員の皆様に足を運んでいただきました。今後も、誰もが楽しめるアトリオンでの研修をご紹介しますと思います。十月末には市内小学校の音楽発表会も開かれるなど、「アトリオン音楽ホールは、秋田の児童生徒や芸術文化を育てます。」  
またご案内いたします！(羽川)

## 四、酒蔵探訪「天の戸の名酒を飲む」

二月十四日、初参加二名を含む十名で出発。昨年七月に急逝した故森谷杜氏が醸した貴重な酒と、現職菅原副杜氏が初めて醸した新酒を味わう研修会。柿崎社長自ら出迎えていただく中、酒造りの工程を一巡。この日の絞りは純米吟醸「ランドオブウオーター」。生のピリピリ感がたまりません。今年のお品予定酒も試飲し、大満足。その後、酒香寿を使った料理と新酒の数々を提供いた

だき堪能。参加者は、新体制の蔵を応援すべく、各々数本のお酒を購入し帰宅しました。蔵人たちがワンチームになり、新たな天の戸を築いていこうとする意気込みを感じました。(大山)

### 事務局から

#### ○令和二年度年間行事予定

- ・秋田市退職校長会
- 監査 令和2年4月16日(木) 午前10時30分
- 理事会 4月25日(土) 午前10時30分
- 現職・退職校長会教育懇談会 11月14日(土) 午後2時00分

#### 謹んでお悔やみ申し上げます

令和2年1月31日現在(敬称略)

- ・進藤 彰一 令和元年5月8日ご逝去
- ・大淵 榮 令和元年5月12日ご逝去
- ・伊藤 一 令和元年5月19日ご逝去
- ・根本 淑 令和元年7月3日ご逝去
- ・大泉 穰 令和元年7月18日ご逝去
- ・齋藤 悦 令和元年9月6日ご逝去
- ・池端 力 令和元年10月20日ご逝去
- ・西村 慧 令和元年11月1日ご逝去
- ・加藤 安總 令和2年1月21日ご逝去

#### 祝叙勲

(敬称略)

- ・瑞宝双光章 高齢者叙勲

加藤 英 一一 秋田市新屋表町